LINE テキストチャットにおける分析単位の規定と接続表現の使用傾向

落合　哉人

キーワード：分析単位の規定、LINE、対人場面、ケータイメール、接続表現の使用傾向

要　旨

本稿では、LINE 上の言語使用を分析する際の単位に関して議論を行った。特に、「発話の分割」に着目して観察し、「発信の単位」「役割の単位」「話題の単位」という 3 つの単位を抽出した。また、議論を踏まえるケーススタディとして LINE・対人場面・ケータイメールにおける接続表現を分析し、①先行する調査同様、LINE で接続詞の出現頻度が低いこと、②ケータイメールにおける接続詞の使用傾向に LINE と類似の特徴があること、③LINE・ケータイメールで接続助詞の相対的な増加が見られること、④直後に主節が続く従属節末の接続助詞では、各媒体で接続詞の使用傾向と類似の特徴を指摘できること、⑤直後に主節が続かない節末の接続助詞では媒体ごとに異なる使用傾向があることの 5 点を見た。さらに、特に LINE では対他的な接続詞の使用に制約があることを考察した。

1. はじめに

2011 年に開発されたアプリケーションソフトウェア「LINE」は、2000 年代を中心に普及したケータイメールに替わるコミュニケーションメディアとして広まり[1]、近

[1] 総務省(2018)によれば、10 代の平日のケータイメール平均利用時間は 2012 年から 2013 年にかけて大幅に減少しており（47.9 分→23.8 分）、代わりに LINE を含むソーシャルメディアの利用時間が急増している（26.9 分→48.1 分）。同様の傾向は 20 代でも窺える。また、LINE 単独では、総務省情報通信政策研究所(2018)において、2012 年から 2013 年にかけて利用者が大幅に増加したことが示されている（10 代：38.8%→70.5%、20 代：48.9%→80.3%）。なお、本稿では一般的な使用実態に則し、テキストチャット機能を用いた言語使用のみを LINE 上の言語使用として扱う。

年の日本では、幅広い年代で日常的な情報伝達の手段として機能する実態がある。たとえば、総務省情報通信政策研究所(2018)では、2017年の時点で10代から60代までの全年代平均で 75%以上の人々が LINE を利用していることが報告されているほか、最も利用者率の高い 20 代では、ほぼ全数（95.8%）の人々が LINE を利用していることが示されている。そのような普及状況からは、2010 年代の日本語のあり方を捉える上で、LINE に着目することは避けて通れないことが示唆されるが、LINE 上の言語使用に対する分析は、未だそれほど進んでいない。特に、LINE に関する近年の研究（岡本 2016, 岡本・服部 2017, 加納ら 2017 等）では、スタンプを含むユーザーインターフェイスに特有な記号類が着目される傾向にあるが、LINE という発話環境あるいはそのような発話環境で展開されるコミュニケーションの特徴を厳密に記述するためには、LINE 以外の媒体でも一般的に見られる言語的要素にも目を向けた上、多様な媒体の中での相対的な位置づけを明らかにすることが欠かせないと言える。

本稿は、以上の考えに基づき実際に LINE 上の言語使用を、他の媒体との比較も念頭に置いて分析する際、考慮が必要と思われる方法論的問題について議論を行うものである。また、議論から見出された知見を踏まえ、LINE を含む複数の媒体における接続表現（接続詞・接続助詞）の使用傾向について調査及び分析を行う。

本稿の構成は以下の通りである。まず、2章では、近年のLINEを対象とする研究のうち、そこでのコミュニケーションについて最も包括的な記述を行う西川・中村(2015)を概観し、本稿が着目する問題を明らかにする。次に 3 章では、LINE 上の談話のうち「発話の分割」の観察を通じて、2 章で挙げた問題のひとつの解決案を示す。続く 4 章では、3 章の議論を踏まえ、LINE・対人場面・ケータイメールの 3 者を対象とした接続表現の使用傾向調査を行う。5 章は本稿のまとめである。

2. 先行研究と問題の所在

2.1 先行研究

LINE に関する近年の言語研究周辺の検討として、既読表示機能[2]の利用者意識への影響を分析する加藤(2016)や、スタンプ[3]を用いた対人関係構築を分析する岡本(2016)

[2] 既読表示機能について加藤(2016)は「受信者がメッセージを読んだことを送信者に知らせる」機能と説明している（同, p.20）。

[3] スタンプは従来型の絵文字や顔文字に並ぶ視覚的表現の一種であるが、後述するように単独で一発信を形成することや、文字を含むものもあることが特徴と言える。

及び岡本・服部(2017)、句読点等の用いられ方を分析する加納ら(2017)、利用者に対するインタビューを通して LINE におけるコミュニケーションの特徴を抽出する西川・中村(2015)等が挙げられる。これらの研究はいずれも、LINE（あるいは「打ちことば」媒体）に特有のユーザーインターフェイスや言語的要素と実際のコミュニケーションの関係について、重要な調査・報告を行っているが、ここでは特に、個別のユーザーインターフェイスや言語的要素に留まらず包括的にコミュニケーションの特徴を提示する西川・中村(2015)に触れる。

西川・中村(2015)は、LINE 上で過去に行われたやりとりのスクリーンショット（端末上の画面を捉えた画像データ）を実際にそのやりとりに関わった会話の参加者と共有しながら、インフォーマルインタビューを行っている[4]。その上で、インタビューにおいて得られた回答について質的な検証を行い、LINE 上のコミュニケーションに(1)〜(5)のような特徴があることを指摘している[5]。

(1) やりとり速度が極端に速い例がある一方、一旦途切れた会話が翌日再開されるような場合でも、スムーズに会話が継続される
(2) 複数の話題が同時並行でやりとりされる話題の輻輳が問題なく遂行されている
(3) スタンプ機能以外にも、従来のメールでも用いられてきたテキストでの顔文字表現も行われ、テキスト以外の表現の工夫や使い分けが生じている
(4) 同じスタンプや画像を別なニュアンスで多用し、しかも誤解なく了解されている
(5) 極端に短文化され、省略されたメッセージの理解のためテキスト内外の文脈への依存度の高いコミュニケーションである

（(1)〜(5)は西川・中村 2015, p.47 要旨）

同論の検討のうち、(1)に関しては、Ⅰ）実際の対人場面では発話から発話の間に数時間から数日といった長時間の空白が生じることはあり得ないこと、Ⅱ）電子メールでは複数の相手とのやりとりが同時に生じた場合、対応する際に困難が生じることの2点を踏まえ、Ⅰ）Ⅱ）どちらのやりとりの特徴も観察される LINE には「高速のやりとり」と「間の空いたやりとり」の双方に対応できる性質があることが指摘されてい

[4] 同論のインタビュー調査では、LINE 上のやりとりのデータの提供を行っていない者も若干名（2名）対象に含まれている。
[5] (1)〜(5)のうち、特に(1)(2)(5)の特徴と実際の言語使用との関わりは、落合(2018b）も参照。

る。また、特に「高速のやりとり」を可能にする要因として、(5)のような方略（短文化・省略）がとられることに言及がなされている。

次に、(2)は、LINE 上のやりとりにおいてしばしば(6)のように複数の話題が同時に進行することに対する言及である。(6)のような話題の同時進行は、IRC（Internet Relay Chat）を対象とした Werry(1996)や Yahoo!チャットを対象とした三浦・篠原(2002)でも既に指摘されていることから、テキストチャット全般に見られる現象[6]と言えるが、音声を基調とする対人場面では、複数の質問に複数の回答を続けて行う場合等、ごく限られた場面でしか生じないことが想定される（なお、(6)では A1 及び B1 が「出身高校の場所について」の話題に、A2 及び B2 が「A が同級生に話しかけられないことについて」の話題に対応しており、それぞれの話題は独立に進行している）。

(6)（出身高校の場所について｜A が同級生に話しかけられないことについて）[7]
A1：こちら田舎ですから（笑）
A2：恥ずかしがり屋なんですよ
　　シャイボーイだから（笑）
B1：やーいやーい田舎者～
B2：がんばって（笑）　(LINE, 009)

最後に(3)と(4)は、LINE における視覚的表現の用いられ方が、LINE 普及以前に普及していたケータイメールにおけるエモティコンの用いられ方を引き継ぎつつも、スタンプが加わったことで、より多様化していることを指摘するものである。従来型のエモティコンの機能の分析については既に一定の蓄積があるが（荒川 2004, 中丸 2005 等）、西川・中村(2015)における特に重要な指摘として、「従来型のエモティコンは、書かれているテキストの意味を補助的に強調、補足するもので、言語的表現が主であるのに対して、スタンプでは感情表現が主であり、（筆者略）テキスト表現が従である場合が多い」（同, p.54）ということが挙げられる。たとえば、従来型のエモティコンは基本的に使用位置として、(7)のように文の末尾に置かれ、発話のニュアンスや視覚的情報の補足を行う役割を持ってきたと考えられる。一方で、LINE におけるスタ

[6] 正確には、後述の 4 章で扱うケータイメールのデータでも同様の現象は観察されていることから、テキストベースのコミュニケーション一般に観察される現象であると言える。
[7] 本稿で例示するデータの詳細は後述。

ンプは、(8)のようにしばしば単独で特定の感情表現の伝達を担うだけでなく、(9)のように文が後から補足的に配置されることもある。

(7)（対話の始発部で）[8]

A：バイトおわったかな？

→B：おわって今おウチです(^o^)／

→A：お疲れさん(^_^)俺もつかれちった(>_<)　　（ケータイメール, 2005, 389-391）

(8)（今、Bがテレビでハンドボールの試合を観ていることについて）

B：ジャンプかっこいい！

A：さっぱり

B：サッカーよりかっこいい！

A：さっぱり

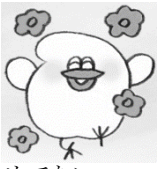
→B：

（LINE, 004）

(9)（テストについて）

A：同じ問題だったの？

B：同じ問題だった

→A：

→A：めでたい　　（LINE, 020）

(8)(9)のような例からは、スタンプが従来型のエモティコンに比べると、より独立した機能を持つ視覚的表現として用いられていることが推測される。さらに、西川・中村(2015)における(4)の指摘は、LINE 上のやりとりにおけるそのようなスタンプ・エモテ

[8] 本稿では、発話例を提示する際、特定の発話全体に着目している場合は話者を示す記号（(7)では「A」「B」等）の左横に「→」を用いることでそのことを示す。一方で、特定の発話の一部に着目している場合は「→」は用いず、下線を引いてそのことを示す。なお、発話例全体に着目する場合は特に記号や下線は用いない。

ィコン・それらと同等の性質を持つ画像の使用に、参加者間において相互に理解可能な一定のコードが存在することを示唆するものである。

2.2 問題の所在

前節で見た通り、西川・中村(2015)では、LINE 上のコミュニケーションの特徴について様々な観点から記述がなされており、(1)から(5)までのそれぞれの指摘は基本的にどれも妥当なものであると言える。但し、指摘相互の関係を考えた場合、他のデータを用いて同論の記述を検証する際に若干の問題が生じると思われる点も残っている。たとえば、前節で見た(1)及び(5)では、特に LINE 上で「高速のやりとり」が行われる背景に、発話の短文化・省略といった方略の存在が指摘されているが、(10)のように[9]対人場面の会話でもそのような短文化・省略は日常的に見られる。従って、そのような特徴が本当に LINE に特有のものであるかどうかについては一考の余地がある[10]。

(10)（対話の始発部で）
JM032： え、もう始まってんの?。
JMB008： や、どうでもいいんだよ、雑談だから。
JM032： そう?。
JMB008： ま、夏でしょ。
JM032： 夏だー。
JMB008： ま、夏だね、これね。 （BTSJ，234-16-JMB008-JM032）

そして実際に、LINE 上の言語使用を、対人場面の言語使用やその他の場における言語使用との比較も念頭に置きつつ客観的に分析する際には（即ち、上記の(1)(5)に関する問題の解決に真に取り組むのであれば）、何らかの形で数量的な観察が必要な側面もあると言えるが、同じく西川・中村(2015)が指摘する(2)の話題の同時進行（輻輳）が LINE ではしばしば生じることを踏まえると、どのような単位を基準とすべきか、という問題が浮かぶ。たとえば、対人場面の会話を中心的な分析対象とする研究では、これまで、ターンの移行可能地点を基調とするターン構成単位（Sacks, Schegloff &

[9] (10)は雑談を行う上で「今、夏であること」が適切な内容となり得ることを会話の参加者同士が確認している場面であるが、単独の発話からは文脈を判断することの難しい、「テキスト内外の文脈への依存度の高いコミュニケーション」であると評価できる。
[10] 但し、この問題は落合(2018b)で一部取り組んでいることもあり、本稿では取り上げない。

Jefferson, 1974）やターンの移行及びポーズを基調とする発話文（宇佐美 2013）等、いくつかの単位が分析の際の指標として用いられてきたが、それらがテキストベースの LINE コミュニケーションにおいてどのように反映されるかについては不明な部分が多い。また、当然のことながら、LINE 上では明確に観察できる個々の発信数を対人場面の会話に適用する際にも同様のことが言える[11]。

以上のような問題は、西川・中村(2015)に付随する問題に留まらず、LINE 上のどのような言語使用を分析する際にも、まず考慮すべき根本的な問題であるように思われる。これを踏まえ次章では、実際に LINE 上で行われたやりとりを質的に観察し、LINE を分析する際に用い得る単位をどのように規定できるか議論を試みる。

3. 対象とするデータと観察

3.1 検討の観点とデータ

前章では、近年の LINE を対象とする研究のうち、そこでのコミュニケーションの特徴を包括的に分析する西川・中村(2015)を取り上げ、特に他の媒体との比較を念頭に置いて LINE を捉えた際、分析の基準となる単位が問題となり得ることを述べた。前章を踏まえ本章では、実際に収集した LINE 上の談話データを「発話の分割」に着目して観察し、3 種類の単位を抽出できることを指摘する。

本稿で観察する LINE 上のデータとして、関東地方の複数の大学に所属する学生及び 20 代前半の社会人から、2014 年 5 月から 2018 年 9 月にかけて収集した雑談 26 件（計 3474 発信[12]）を挙げる。談話 1 件は、スマートフォンのスクリーンショットで、始発部から 15〜20 枚程度の分量であり、語られる内容は、「趣味に関する話」「近況報告」「ゴシップ」のいずれかを中心とする、特定の課題解決を志向しないもの[13]である。また、やりとりを行う参加者の人数及び参加者同士の関係性はすべて、2 人（つまり、1 対 1）かつ親しい友人同士である。本稿で対象とするデータの一部は、同じく LINE 上の雑談を取り上げた落合(2018ab)と一部重複するものであるが、（少な

[11] なお、語や形態素といった小さな単位も基準としては想定し得るが、その場合には絵記号等の視覚的表現をどのように捉えるかという別の問題が生じるほか、談話レベルで生じる言語現象の様相が捉えにくくなる可能性がある。本稿ではそれらの単位を分析の対象とすることは措く。
[12] スタンプ及び、絵記号・URL・画像等が単独で一発信を形成するものは数に含めていない。
[13] 但し、本稿が扱うデータの中には雑談の最中に挿入される形で一時的に、課題が生じるものも見られたため、そのような部分は一律に分析の対象外としている。

くとも雑談を行う際には）3 人以上を含むやりとりに向かない、ケータイメール等との比較も念頭に置き、本稿ではすべて 1 対 1 のやりとりに統制することとした。

3.2 構成単位の観察

西川・中村(2015)で指摘されるように、LINE 上のコミュニケーションでは、しばしば(11)のように短い時間的間隔で複数の発信が交わされることがある。本稿が対象とするデータでは、そのような「高速のやりとり」がなされた場合、確かに個々の発信は極めて短く、(11)A2 や B4 のように先行発話と重複する要素の省略が行われたり、談話外の文脈に依存する情報提示（例として、A4 の発信「オールのテンション」は共有されている集合写真が徹夜（＝オールナイト）をした際に撮影されたものであることを指していると推測される）がなされたりする特徴が観察された。

(11)（集合写真について）　　送信時刻
A1：これよくねー？　　[0:57]
B1：懐かしい　　[0:57]
→A2：だろ　　[0:57]
B2：自分がはしゃぎすぎてんよー　　[0:57]
A3：いいじゃん　　[0:57]
B3：ちょい恥ずかしい　　[0:57]
→A4：オールのテンション　　[0:57]
→B4：だな　　[0:57]　　（LINE, 001）

一方で、個々のデータでは、必ずしも 1 件の発信のみで役割交替がなされるわけではなく、一人の話者が一度に複数の発信を行う(12)のような例も多く見られた。

(12)（宝塚歌劇団の新人公演について）
A1：すっごく良かった！
A2：本公演でも観たいなってくらい❤
A3：ゆいなちゃんラムセスもチャラかった👏👏👏
B1：チャラかったのか！最高！❤
B2：みたかったなー　　（LINE, 038）

(12)のような例は、LINE 上の個々の発信が対人場面における個々のターンと直ちに結びつかないことを示すものであるが、詳細に個別の事例を見た場合、そのような「発話の分割」も一様ではなく、「(A)単純に複数の発信がなされる例」「(B)一文が複数の発信に分割される例」「(C)言及される話題ごとに発信が分割される例」といった 3 種類の様式に分けられることが窺える。以下ではそれぞれの実例を観察したい。

まず、「(A)単純に複数の発信がなされる例」については、例として先に提示した(12)における A1-A2-A3 及び B1-B2 や、(13)における B1-B2 を挙げることができる。この様式は、基本的に 1 文ないし 2 文程度の情報量で構成される複数の発信が連なるものであり、(12)及び(13)のようにそれぞれの発信が言及する話題は同一あるいは極めて連続的なものである。従って 3 種類の様式の中では最も単純に発話の内容が分割されたものと見ることができる。但し、収集したデータを観察する限りこの様式に属する発信の分割においても、連続する各発信は、先行する発信が直前の他者の発信の内容に対応し、後続する発信が「自己の捉え方」「知識の開示」「発話内容の修正[14]」等の補足的情報を示すというように、場面ごとに若干の工夫があることが推測される。

(13)（高校の非常勤講師として働きはじめた A）
A1：新任の挨拶に行ってきました
→B1：お疲れ様でした。
→B2：周りの先生方の様子はどうでした？？
A2：良い先生たちだったね。 （LINE, 039）

また次に、「(B)一文が複数の発信に分割される例」については、例として(14)における B2～B7 や、(15)における B1～B3 を挙げることができる。(14)では「昨日帰りあ

[14] 発話内容の修正の例として(ⅰ)のような誤字の訂正を挙げることができる。このような例は 2017 年末までの LINE アプリケーションの仕様として、一度提示してしまった発信を取り消すことができなかったことに起因するものと捉えられるが、一方で、2017 年 12 月の機能更新において 24 時間以内であれば発信を取り消せるようになった後に収集したやりとりにおいても依然として複数例観察されている。また、そのような実態の背景には未だ、発信を取り消した際、「取り消したこと」が表示される仕様が残されていることがあるように思われる。但し、用例自体が少ないため、詳細な検討は今後の課題としたい。

(ⅰ)（バレーボールについて）
B：もうそろそろサーブ上から打ってみていいんじゃねる
→B：るは？です （LINE, 001）

のあと俺の大王具足虫いじってきていらっとした」という文が、(15)では「とりあえずミーティングかな」という文が、それぞれ複数の発信に分割されている。このような一文の分割は、日本語のテキストチャットを対象とする先行研究において「分かち書き」（三浦・篠原 2002）と呼ばれている現象であり、基本的には文節単位で発信が分けられるものと見られる。但し、本稿が対象とするデータでは、(15)のようにさらに小さな単位で発信が区切られる場面も少数（2 例）ではあるが、観察された。

(14)（共通の友人 F について）
　B1：F こわい
　A1：こわくないだろ
→B2：昨日
→B3：帰り
→B4：あのあと
→B5：俺の大王具足虫
→B6：いじってきて
→B7：いらっとした
　A2：いらっとするあなたがこわいです　（LINE, 003）
(15)（共通のボランティア活動について）
　A1：だれもそんなキャパはない…
→B1：とりあえずミーティング
→B2：か
→B3：な
　A2：窓口の？　（LINE, 014）

最後に、「(C)言及される話題ごとに発信が分割される例」については、前章で既に見た(6)のような、複数の話題が同時に進行（輻輳）する場面を例に挙げることができる。この様式で発話が分割された際の特徴として、ア）隣接する発信相互（例として(6)A1 と A2）は直接的な対応関係を持たず、極めて独立的にやりとりが進んでいくことと、イ）直接的な対応関係を持つ発信相互（例として(6)A1 と B1）では、結束性を明示する要素が積極的に出現するほか、話題が提示される順序も先行するものと後続するもので守られることの 2 点が指摘できる。これらの特徴のうち、特にイ）は(C)のような様式を用いたコミュニケ―ションを成立させていく上で欠かせないものであ

ると言え、先行する話題と後続する話題の順番が崩れる例外的な場面では、いずれかの話題がそこで途切れてしまったり、あるいは、やりとりに齟齬が発生したことが言及されたりする様子が見られた。

再掲(6)（出身高校の場所について｜A が同級生に話しかけられないことについて）
A1：こちら田舎ですから（笑）
A2：恥ずかしがり屋なんですよ
　　シャイボーイだから（笑）
B1：やーいやーい田舎者～
B2：がんばって（笑）　(LINE, 009)

たとえば、(16)[15]は、「実習の日誌について」の話題と「部活動について」の話題という異なる話題が進行する場面であり、前者の話題には B1→A1-A2→B5-B6→A5→B7-8→A6-7 の各発信が、後者の話題には B2-4→A3→A4 の各発信がそれぞれ対応している。この場面では、B1 から B6 まで、「実習の日誌について」→「部活動について」という話題提示の順序が守られているが、話者 B が前者の話題に対応する B6 を発信した後、後者の話題に言及する前に、話者 A が後者の話題に関する内容を送ってしまい、話題提示の順序が逆転している。その結果、続く B7-B8 では「実習の日誌について」の話題にのみ応答がなされ、「部活動について」の話題は途切れたまま、やりとりが進行している。このような例からは、LINE 上で複数の話題を同時に進行させることができるとしても、その背後には一定の規則があることが窺える。

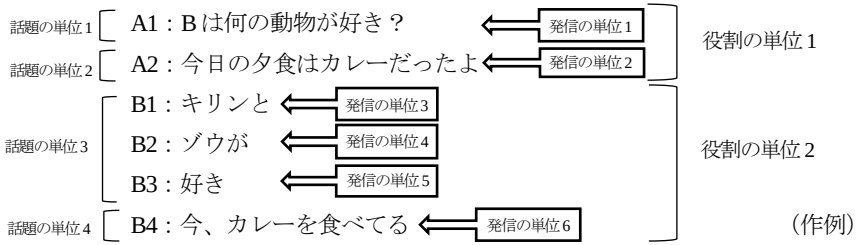
(16)（実習の日誌について｜部活動について）
B1：学科のは毎日見開き 1 ページだった
B2：部活か
B3：だる
B4：教えることないのに
A1：みひらき 1 ページ！
A2：おおい
A3：それな…

[15] (16)は先に見た(A)の様式の特徴も併せ持つ例である。

B5：実習簿は書けるよ
B6：2度と読みたくないけど
→A4：毎日発見はありそう(..)(_)
→A5：どゆこと？
B7：文章やばいよ
B8：主語と述語がつながってなかったり
A6：テキトー？
A7：わぉ （LINE, 006）

以上、観察したように、本稿が対象とする LINE 上のデータからは「発話の分割」であってもそのあり方にいくつかの様式があることが推測される。また、それぞれの様式を踏まえた場合、LINE 上のやりとりの構成単位は、「発信の単位」「役割の単位」「話題の単位」の 3 種類を想定することができる。(17)に示す作例をもとに説明を行えば、このうち「発信の単位」は A1 から B4 までに送られた個々の発信の内容を指すものであり、「役割の単位」は A1-A2 または B1-B4 といった同一話者による発信が連続する範囲を指すものである。同様に、「話題の単位」は「好きな動物について」言及する A1 と B1-B3 や、「今日の夕食について」言及する A2 と B4 といった、同一話者によって同一の話題に言及がなされる範囲を指すものである。

(17)（好きな動物について｜今日の夕食について）



（作例）

即ち(17)は、「発信の単位」が 6 件、「役割の単位」が 2 件、「話題の単位」が 4 件から構成されるものと見ることができる。これらの単位は先に見た(16)のように、当然ながら重複することもある。仮に、ひとつの話題にしか進行中のやりとりの中で触れられておらず、1件の発信がなされたのみで話者交替が行われた場合、3種類の単位はすべて同じ範囲を指すことになる。一方で、先に(A)(B)(C)各様式の説明において見た

通り、LINE コミュニケーションの参加者は、発話内容を分割する際、常に何らかの目的を意図していると考えられ、少なくとも後からそのことを探る際には、証拠とする表現のあり方に応じてそれぞれの単位は一定の有効性を持つと思われる[16]。

また、ここまでの観察を踏まえて、前節で触れた他の媒体における言語使用との比較という問題のうち、特に対人場面との比較について補足すれば、LINE における「話題の単位」は、相対的に[17]最も対人場面におけるターンとの比較に適したものと見ることができる。既に見たように、LINE 上で個々の発信は同一話者によって連続して示されることがあるため、「発信の単位」は対人場面のターンと結びつけられないことが多い。同様に、同一話者が連続して発信を行う範囲すべてを含む「役割の単位」では、複数の話題が同時に進む場合、対人場面のターンより多くの情報量が含まれ得る。対して、収集したデータを観察する限り「話題の単位」ではそのような問題は生じにくく、対人場面におけるターンと互換しやすいことが窺える。以上を踏まえ次章では、便宜的に各媒体における「話題の単位」相当の情報量をターンと呼び換えた上、実際に LINE を含む複数の媒体間の言語使用上の共通点・相違点を分析する。

4. 媒体ごとの接続表現の使用傾向に対する調査と分析

4.1 調査の背景

前章では、実際に収集した LINE 上の談話のうち、特に「発話の分割」の観察から、分析の基準となる単位として 3 種類の候補を抽出した。また、それらのうち特に「話題の単位」は、対人場面の会話におけるターンとの比較に適した単位として捉えられることを述べた。本章では、前章の観察を踏まえた分析の一例として、LINE・対人場面・ケータイメールの 3 者における接続表現の使用に焦点を当てる。

筆者は落合(2018b)において、独自に収集した LINE 上の談話データと、対人場面の会話を書き起こしたコーパス（『名大会話コーパス』）を対象に、接続詞の使用傾向を調査した。その結果、両者では同じく雑談的なやりとりでも接続詞の出現頻度に大きな異なりがあること（表 1）、その背景に LINE 上のコミュニケーションで生じる、発話を極力簡潔に保つ要請があることを指摘した。一方で、本稿前章までの分析を踏まえた場合、同論で示した出現頻度は総文数が基準である点で未だ検証の余地がある

[16] たとえば、(B)で見た「分かち書き」の特殊性は「発信の単位」を想定してはじめて捉えられる。
[17] ここであくまで「相対的に」とするのは、対人場面においても複数の参加者の発話がオーバーラップを起こす場面等、ターンの認定が困難な場面があるためである。

と言える（対人場面の「文」はコーパス上の句点に従ったが、そこでの句点の用いられ方が LINE 上の文の認定方法と同等であるか検討が行われていない）。

表 1　LINE と対人場面における接続詞ののべ語数と総文数あたりの出現頻度

	のべ語数	出現頻度
LINE（4824 文）	197	4.08%
対人場面（12049 文）	1847	15.33%

（落合 2018b, p.21 表 1）

また、仮に LINE 上で相対的に接続詞の使用が少ないことが確かめられた場合、そのような結果は LINE コミュニケーションにおいて選好される情報伝達のあり方についてさらに 2 種類の解釈を生むと思われる。即ち、「LINE では、接続表現を要するような（連文や複文を内包するような）複雑な発話自体が好まれない」とする解釈と、「LINE では、接続詞は用いられにくいが、類似の文法機能を持つ接続助詞等により、発話内の連接関係が示される」とする解釈である。これらのうち、どちらが妥当であるか検証するためにも、より広い分析の必要があることは言うまでもない。

ところで、上記で述べた内容は本稿が接続表現の使用傾向に引き続き着目する大きな理由であるが、特に接続助詞に着目した場合、個別の語に留まらず複数の語を広く収集し、その一般的な使用傾向を報告する研究は、話しことば的媒体を対象とする限り[18]、非常に少ないように思われる。一方で、話しことば的媒体（文体）では、(18)のように接続助詞で「文」が終わる発話も多く、書きことば的媒体（文体）と異なる傾向が観察されることが予測される。従って、そもそも日本語話者が対人コミュニケーションにおいてどの程度接続助詞を用いるかということ自体に検討の余地がある。

(18)（対話の相手が電話を無視されたことを責めるのに対して）
B：（前略）てか、ァタシあんたの番号知らないんですけど〜〜。そりゃシカトするぁ(-_-)。。。今度ぁちゃんとでま〜す☆　　（ケータイメール, 2005, 242）

以上を踏まえ、次節以降では、前章までに触れた LINE 上のデータと、コーパス及びデータ集における対人場面の会話、ケータイメール上の談話の 3 者における接続表現（接続詞・接続助詞）の使用傾向を調査し、結果の分析を行う。

[18] 書きことば的媒体を対象とするものとしては、宮内(2012)等が挙げられる。

4.2 調査の内容と観点

調査に先立ち、本章で扱うデータに触れておく。先述した通り本章では、LINE・対人場面・ケータイメールの 3 者を対象に接続表現の使用傾向を調べる。対象とする媒体のうち、LINE と対人場面を扱う理由はこれまでに触れた通りであるが、その 2 者のみを扱う限り、仮に LINE 上で特殊な言語使用が観察されたとしても、それが LINE という媒体独自のものであるのか、テキストベースのコミュニケーション独自のものであるのか区別しにくいことが予想される。これを踏まえ、ケータイメールも比較対象として扱うことで、より広く媒体間の共通点・相違点を分析することとした。

本章で具体的に扱うデータとして、まず、LINE に関しては前章で見た 26 件の談話データを引き続き扱うこととする。なお、前章の議論を踏まえ、観察するデータはすべて「話題の単位」に基づいてターンの認定を行ったが、その際の方法に関してさらに若干の補足を要するため、ここで述べておく。

前章では、LINE 上で話題の同時進行（輻輳）が生じる際、結束性を明示する要素や話題提示の順序によって、どの発信がどの話題と対応するか観察できることを見た。一方で、そのような状況の始発部では多くの場合、まったく異なる話題が突然出されるというより、緩やかに関連はある別の内容が示される様子が見られる。たとえば、(19)では A1 に対して話者 B が B1 で応答を行った後、さらに自己が感じた「意外性」を B2 で付け加えている。これに対して、話者 A は B1 に A2 で、B2 に A3 で個別に応答した結果、以後「就職活動の様子について」の話題と「芸能ネタについて」の話題が独立に進行することになる。この例における A2 と A3 がそれぞれ別の発信に対応することは、応答詞の使用や「芸能」という語彙の使用から容易にわかるが、それ以前の B1 及び B2 の時点で両者が異なる話題に言及したと見ることには困難がある（少なくとも、読み手によって判断に揺れが生じ得る）。従って、遡及的に話題の同時進行の始発部と見なし得るとしても、きっかけとなる発信自体は単一の話題しか持たず、応答が個別になされてはじめて、話題が複数になったと判断すべきであると言える。

(19)（就職活動の様子について｜芸能ネタについて）
A1：だから最近は自分に正直に、芸能事務所とか遊園地とか自分の好きなところうけてる。笑
B1：そういう受け方もいいかもね。俺もゲーム会社もう少し増やそうかな。
B2：てか芸能事務所って意外だな。遊園地はこの前話とかしたけど。

A2：うん。なんか、好きなこと全面に推してたら落とされると思ってたけど、やりたいことが一番だからね。
A3：芸能オタクってくらい芸能ネタ好きだからさ。笑　（LINE, 008）

本章の調査において LINE 及びケータイメールにおける話題の同時進行（輻輳）場面では、以上のことに配慮してターンの認定を行った（対人場面の会話では、そもそも複数の話題が同時に進行する場面は確認できていない）。

次に、対人場面の会話に関しては、宇佐美まゆみ監修(2018)『BTSJ 日本語自然会話コーパス』（BTSJ）に含まれる日本語母語話者同士の雑談 14 件（計 237 分）を扱う。このデータは、同コーパスに含まれる音声付きデータのうち、1)日本語母語話者かつ友人同士の雑談であること、2)話者の重複がないこと、3)ある程度の長さ（15 分程度）が確保されていることの 3 点を満たす範囲で収集できるすべての会話である。データセットの上では、「16. 友人同士雑談及び討論（同性、異性）」と「23. 初対面及び友人同士雑談（女性同士）」の両フォルダからファイル名先頭の番号が若い順に上記の条件に合致するものを抽出した。なお、BTSJ におけるトランスクリプトは発話文によって発話を区切る方式が採られているが、本章の調査では同一話者による連続した発話文をまとめてひとつのターンと見なす措置を取った。一方で、オーバーラップ等により、ひとつの発話文の間に他者による別の発話文が挟まれる場面（トランスクリプト上で発話末に「„」が用いられる場面）は、復元して同一ターンと見なした。

最後に、ケータイメールに関しては、三宅(2006)において公開されているデータ集から収集した談話データ 47 件（計 383 発信）を扱う。同データ集は、2003 年から 2005 年の 3 年間にわたって関東地方にある大学の学生から収集されたケータイメールを書き起こしたものであるが、本稿ではそのうち、特に「報告」や「勧誘」等を伴わない雑談的な内容のものをすべて対象とすることとした[19]。なお、三宅(2006)のデータは談話 1 件が長くても 5 往復程度で構成されるものであり、先に見た LINE や対人場面における平均的なやりとりに比べれば短いと言わざるを得ない。但し、本稿執筆時では

[19] 三宅(2006)では、談話参加者の親疎についても「親」あるいは「非親」が割り振られているが、個々の談話を観察する限り、親疎の差はそれほどコミュニケーションのあり方に直接的な影響を与えていない様子が見られる（基本的に「親」であれ、「非親」であれ、普通体基調である）ほか、仮に「親」のデータのみを対象とした場合、扱えるデータが非常に少なくなってしまうことが予想されたことから、本章ではこの項目は特に統制を設けずデータの選定を行った。

（特に雑談的な内容のやりとりを対象とする場合、）新たにケータイメールのデータを収集することが難しいことから[20]、暫定的に研究対象として扱うことにした。

本稿が対象とする各媒体の総ターン数を表 2 に示す。

表 2　本稿が対象とする媒体

	総ターン数
LINE	2418
対人場面	4010
ケータイメール	443

調査においては以上のデータにおいて観察される接続詞及び接続助詞の使用傾向を、全体的な出現頻度と個別の語の割合の双方から整理する。その際、接続詞と見なす語については、落合(2018b)同様、石黒ら(2009)の規定に基づいて認定する[21]。一方で、接続助詞と見なす語については、特に条件節及び等位節を形成する「と」「ば」「たら」「なら」「ので」「から」「けど」[22]「が」「のに」「し」の 10 語を対象とする[23]（このうち「なら」は、活用語の終止形に接続するもののみを対象とし、名詞・代名詞に付加されたものは分析の対象としない）。

なお、接続助詞は、発話中において使用される位置についても、直後に主節が続くかどうかによって 2 点に分類する（便宜的に、接続助詞が用いられた後、主節相当の内容が続く場合は「文中」、続かない場合は「文末」と呼ぶ）。但し、仮に「文末」相当の位置において観察されるものでも、明確に倒置文であると考えられる事例（主節相当の内容が直前に確認され、そのままの形式で元の文に復元可能な事例）は、「文中」における使用と判断する。

[20] その背景に、電子媒体を用いたコミュニケーションの場の LINE を中心とするソーシャルメディアへの移行があることは想像に難くないであろう。

[21] なお、同じ語の連続は、出現数を数える際、一度のみの出現と考える。

[22] 「けれど」と「けれども」も「けど」の異形として数える。

[23] 特に条件節及び等位節を形成する語を対象にするのは、互換可能な接続詞が多いためである。また、ここでの従属節の分類は日本語記述文法研究会編(2008)に拠っている。なお、同論ではここで挙げる語以外にも、「ために」「からには」「ばかりに」「もので」「くせに」「反面」「うえ（に）」等多様な語を条件節・等位節を形成する要素として挙げているが、談話データにおいて使用例がほとんど確認できなかったり（媒体ごとに 1 例以下）、同形の内容語との判別が困難な事例があったりするため、本章では分析対象外とした。一方で、そのような理由には当てはまらないものの、本章で取り上げない接続助詞として「て」が挙げられるが、こちらは反対に極端に使用率が高い上、明示する連接関係も多岐にわたることから対象としなかった。

4.3 調査結果と分析

4.3.1 接続詞の使用傾向

はじめに、接続詞の使用傾向を確認する。各媒体における接続詞全体の出現頻度を表3に、語ごとの割合を表4～表6に、それぞれまとめる。なお、表4、表5、表6における「数」は語ごとの出現数を、「接続詞」は接続詞全体に占める割合を、「ターン」は総ターン数あたりの出現頻度を、それぞれ示すものである。

表3　各媒体における接続詞ののべ語数と出現頻度（総ターン数あたり）

	のべ語数	出現頻度
LINE	186	7.7%
対人場面	1047	26.1%
ケータイメール	103	23.3%

表4　接続詞と出現頻度（LINE）

	数	接続詞	ターン
でも	36	19.35%	1.49%
じゃあ	28	15.05%	1.16%
というか	24	12.90%	0.99%
しかも	11	5.91%	0.45%
ちなみに	11	5.91%	0.45%
あと	11	5.91%	0.45%
だから	7	3.76%	0.29%
そして	7	3.76%	0.29%
ただ	7	3.76%	0.29%
結局	6	3.23%	0.25%
それとも	4	2.15%	0.17%
それなら	4	2.15%	0.17%
むしろ	4	2.15%	0.17%
逆に	3	1.61%	0.12%
だけど	4	2.15%	0.17%
けど	3	1.61%	0.12%
しかし	3	1.61%	0.12%
そうしたら	2	1.08%	0.08%
とくに	2	1.08%	0.08%
さらに	1	0.54%	0.04%
だって	1	0.54%	0.04%
つまり	1	0.54%	0.04%
で	1	0.54%	0.04%
と	1	0.54%	0.04%
ところで	1	0.54%	0.04%

表5　接続詞と出現頻度（対人場面）

	数	接続詞	ターン
でも	309	29.51%	7.71%
で	229	21.87%	5.71%
だから	126	12.03%	3.14%
じゃあ	86	8.21%	2.14%
それで	45	4.30%	1.12%
だって	43	4.11%	1.07%
あと	33	3.15%	0.82%
というか	32	3.06%	0.80%
そうしたら	26	2.48%	0.65%
しかも	21	2.01%	0.52%
けど	17	1.62%	0.42%
結局	16	1.53%	0.40%
ただ	12	1.15%	0.30%
例えば	9	0.86%	0.22%
だけど	9	0.86%	0.22%
最初	5	0.48%	0.12%
それが	4	0.38%	0.10%
そして	3	0.29%	0.07%
それでも	2	0.19%	0.05%
それなら	2	0.19%	0.05%
とくに	2	0.19%	0.05%
逆に	2	0.19%	0.05%
要は	2	0.19%	0.05%
しかし	1	0.10%	0.02%
そうすると	1	0.10%	0.02%

それなのに	1	0.54%	0.04%
要は	1	0.54%	0.04%
例えば	1	0.54%	0.04%
計	186	100.00%	7.69%

表 3 からわかる通り、対象とするデータと、頻度を求める際の母数を変えた本稿の調査でも、LINE と対人場面では、接続詞全体の出現頻度に 3 倍以上の差が見られ（LINE, 7.7%：対人場面, 26.1%）落合(2018b)における調査とほぼ同様の傾向が確認された。一方で、落合(2018b)では調査を行わなかったケータイメールでは、全体的な出現頻度を見る限り、対人場面における結果とほぼ同様の傾向が見られた（ケータイメール, 23.3%）。

異なり語数の観点では、LINE において 28 語、対人場面において 35 語、ケータイメールにおいて 24 語の接続詞がそれぞれ確認され、「でも」「で」「だから」「じゃあ」「あと」「というか」「そうしたら」「しかも」「結局」「そして」「それなら」の 11 語が共通していた。また、LINE と対人場面で、特に出現順位上位の語は落合(2018b)の調査結果と変わらない使用傾向（LINE では上位 8 語、対人場面では上位 7 語のバリエーションが変わらず。但し、順位はやや変動しているものがある）が見られた。なお、ケータイメールについては個々の談話が短いため、今後さらに検証が必要なものの、出現順位上位の語は概ね LINE と共通することが読み取れる（但し、こちらも個々の順位にはやや変動がある）。このことを全体的な出現頻度と併せた場合、ケータイメールでは LINE に比べれば遥か

それとも	1	0.10%	0.02%
それなのに	1	0.10%	0.02%
それに	1	0.10%	0.02%
それにしても	1	0.10%	0.02%
だからといって	1	0.10%	0.02%
ただし	1	0.10%	0.02%
また	1	0.10%	0.02%
最後	1	0.10%	0.02%
特に	1	0.10%	0.02%
むしろ	1	0.10%	0.02%
計	1047	100.00%	26.11%

表 6　接続詞と出現頻度（メール）

	数	接続詞	ターン
でも	24	23.30%	5.42%
というか	19	18.45%	4.29%
じゃあ	14	13.59%	3.16%
ちなみに	8	7.77%	1.81%
しかも	5	4.85%	1.13%
それでは	4	3.88%	0.90%
あと	3	2.91%	0.68%
そして	3	2.91%	0.68%
それなら	3	2.91%	0.68%
って	3	2.91%	0.68%
で	2	1.94%	0.45%
では	2	1.94%	0.45%
むしろ	2	1.94%	0.45%
さて	1	0.97%	0.23%
そうしたら	1	0.97%	0.23%
それに	1	0.97%	0.23%
それにしても	1	0.97%	0.23%
だから	1	0.97%	0.23%
ところで	1	0.97%	0.23%
なので	1	0.97%	0.23%
それなので	1	0.97%	0.23%
結局	1	0.97%	0.23%
最初は	1	0.97%	0.23%
特に	1	0.97%	0.23%
計	103	100.00%	23.25%

に多く接続詞が用いられるが、その際の個々の語の現れ方は LINE と近しい実態があると言える[24]。そのような結果は即ち、LINE 上の雑談とケータイメール上の雑談が（論理の組み立て方において）近似した文体的特徴を有することを示唆する[25]。

4.3.2 接続助詞の使用傾向

次に、接続助詞の使用傾向を見る。各媒体における接続助詞全体の出現頻度を表 6 に、語ごとの割合を表 7～表 9 に、それぞれ示す。なお、表 7～表 9 における「数」は語ごとの出現数を、「接続助詞」は接続助詞全体に占める割合を、「ターン」は総ターン数あたりの出現頻度を、それぞれ示すものである。

表 6　各媒体における接続助詞ののべ語数と出現頻度（総ターン数あたり）

	のべ語数	出現頻度
LINE	632	26.1%
対人場面	1381	35.9%
ケータイメール	262	59.1%

表 7　接続助詞と出現頻度（LINE・全体）

	数	接続助詞	ターン
から	168	26.58%	6.95%
けど	146	23.10%	6.04%
し	88	13.92%	3.64%
たら	87	13.77%	3.60%
と	42	6.65%	1.74%
ば	41	6.49%	1.70%
のに	25	3.96%	1.03%
が	15	2.37%	0.62%
ので	12	1.90%	0.50%
なら	8	1.27%	0.33%
計	632	100.00%	26.14%

表 8　接続助詞と出現頻度（対人場面・全体）

	数	接続助詞	ターン
けど	481	33.40%	12.00%
から	359	24.93%	8.95%
たら	190	13.19%	4.74%
し	139	9.65%	3.47%
と	111	7.71%	2.77%
ば	107	7.43%	2.67%
のに	29	2.01%	0.72%
なら	16	1.11%	0.40%
ので	6	0.42%	0.15%
が	2	0.14%	0.05%
計	1440	100.00%	35.91%

[24] 但し、個々の語の用いられ方を詳細に見た場合、用法レベルでは LINE とケータイメールで異なる特徴を見せる語も存在する可能性がある。たとえば、落合(2018b)では LINE 上で、一度送信してしまった内容を次の発信で補足する用法で「というか」が多く出現することを論じたが、通常ひとりの話者が続けざまに何度も発信を送らないケータイメールでは、質的に異なる「というか」が出現する可能性が高い。そのような接続詞の用法面は一考の余地があるが、別稿に譲る。

[25] なお、ケータイメールにおいて見られた語を基調に相関係数を算出した場合（ピアソンの積率相関係数）、LINE との相関は ρ =0.95、対人場面との相関は ρ =0.55 であり、ともに相関は見られるものの、LINE との正の相関の方が高い。

各表から、接続助詞全体の使用傾向は、各媒体で先に見た接続詞全体の使用傾向とやや異なる特徴があることが読み取れる。まず、本稿の調査において、総ターン数あたりの接続詞全体の出現頻度は先述した通り、LINE で最も少なく、対人場面とケータイメールではほぼ同様であったのに対して、接続助詞全体の出現頻度では、対人場面とケータイメールの間に 2 倍弱の差が見られる（対人場面, 35.9%：ケータイメール, 59.1%）。このような結果からは、ケータイメールにおいて、各ターン（「話題の単位」）に含まれる一文の長さが相対的に最も長いことが推測される[26]。

表 9　接続助詞と出現頻度（メール）

	数	接続助詞	ターン
けど	58	22.14%	13.09%
から	55	20.99%	12.42%
し	52	19.85%	11.74%
たら	36	13.74%	8.13%
と	18	6.87%	4.06%
ば	17	6.49%	3.84%
のに	13	4.96%	2.93%
ので	7	2.67%	1.58%
なら	4	1.53%	0.90%
が	2	0.76%	0.45%
計	262	100.00%	59.14%

一方、最も接続助詞の出現頻度が低い媒体は、接続詞と同様、LINE であるが、これも他の媒体との差のあり方に異なる傾向が見られる（LINE, 26.1%）。先に述べた通り、本稿の調査ではターンを基準とした場合にも LINE と対人場面で接続詞全体の出現頻度が 3 倍以上異なることを確認したが、接続助詞全体の出現頻度では、その差が 1.4 倍程度に縮まる。このことから、（条件節及び等位節という狭い意味範囲ではあるが、）LINE 上で接続表現を要するような複雑な構造そのものが好まれないということは言えず、発話内容相互の連接関係は、接続助詞によってある程度担保される傾向があると見ることができる。なお、語ごとの傾向には、使用位置によって同じものであっても性質が異なる可能性があるため、ここでは言及しないものとする。

続いて、各媒体で観察された接続助詞のうち、特に「文中」（直後に主節が続く従属節末）で見られたものの使用傾向を表 10〜表 12 に、「文末」（直後に主節が続かない節末）で見られたものの使用傾向を表 13〜表 15 に、それぞれ示す。各表の「数」は語ごとの出現数を、「接続助詞」はその位置での接続助詞全体に占める割合を、「ターン」は総ターン数あたりの出現頻度を、それぞれ示すものである。

[26] 但し、比較対象となる対人場面の会話で「文」がどのように反映されるか未だ議論の余地があるため、このことに対する詳しい検証は今後の課題とせざるを得ない。また、ここで得られた結果から「ケータイメールでは各ターンに含まれる文の多さが最も多い（即ち、個々の文単位では接続助詞はそれほど多く出現しない）」と推測することも不可能ではないが、その場合、文と文の連接関係を明示する接続詞の出現頻度が対人場面とそれほど変わらないことを説明できない。

表 10　接続助詞と出現頻度（LINE・文中）

	数	接続助詞	ターン
から	114	27.34%	4.71%
たら	84	20.14%	3.47%
けど	75	17.99%	3.10%
と	39	9.35%	1.61%
し	34	8.15%	1.41%
ば	34	8.15%	1.41%
のに	15	3.60%	0.62%
が	9	2.16%	0.37%
なら	7	1.68%	0.29%
ので	6	1.44%	0.25%
計	417	100.00%	17.25%

表 11　接続助詞と出現頻度（対人場面・文中）

	数	接続助詞	ターン
けど	274	29.82%	6.83%
から	192	20.89%	4.79%
たら	177	19.26%	4.41%
と	95	10.34%	2.37%
ば	90	9.79%	2.24%
し	59	6.42%	1.47%
のに	16	1.74%	0.40%
なら	14	1.52%	0.35%
が	2	0.22%	0.05%
計	919	100.00%	22.92%

表 12　接続助詞と出現頻度（メール・文中）

	数	接続助詞	ターン
から	45	25.42%	10.16%
たら	34	19.21%	7.67%
けど	33	18.64%	7.45%
し	22	12.43%	4.97%
と	15	8.47%	3.39%
ば	10	5.65%	2.26%
ので	6	3.39%	1.35%
のに	6	3.39%	1.35%
なら	4	2.26%	0.90%
が	2	1.13%	0.45%
計	177	100.00%	39.95%

表 13　接続助詞と出現頻度（LINE・文末）

	数	接続助詞	ターン
けど	71	33.02%	2.94%
から	54	25.12%	2.23%
し	54	25.12%	2.23%
のに	10	4.65%	0.41%
ば	7	3.26%	0.29%
が	6	2.79%	0.25%
ので	6	2.79%	0.25%
たら	3	1.40%	0.12%
と	3	1.40%	0.12%
なら	1	0.47%	0.04%
計	215	100.00%	8.89%

表 14　接続助詞と出現頻度（対人場面・文末）

	数	接続助詞	ターン
けど	207	39.88%	5.16%
から	167	32.18%	4.16%
し	80	15.41%	2.00%
ば	17	3.28%	0.42%
と	16	3.08%	0.40%
たら	13	2.50%	0.32%
のに	13	2.50%	0.32%
ので	4	0.77%	0.10%
なら	2	0.39%	0.05%
計	519	100.00%	12.94%

表 15　接続助詞と出現頻度（メール・文末）

	数	接続助詞	ターン
し	30	35.29%	6.77%
けど	25	29.41%	5.64%
から	10	11.76%	2.26%
ば	7	8.24%	1.58%
のに	7	8.24%	1.58%
と	3	3.53%	0.68%
たら	2	2.35%	0.45%
ので	1	1.18%	0.23%
計	85	100.00%	19.19%

表 10～表 12 と表 13～表 15 の比較から、各媒体では、接続助詞全体のうち直後に主節が続くものが概ね 3 分の 2 を、続かないものが概ね 3 分の 1 を、それぞれ占めることが窺える。このうち、前者（「文中」）の接続助詞は、(20)及び(21)のように類似の連接関係を示す接続詞と互換可能なことも多いが、特に LINE（表 10）とケータイメール（表 12）で最頻出の 3 語（「から」「たら」「けど」）がすべて同じ順位かつ、同様の割合で見られることは、前項で見た接続詞の使用傾向と併せて考えた場合、着目に値する[27]。これは即ち、両媒体の雑談における「文中」の接続助詞の使用傾向が、接続詞の使用傾向と並行的に捉えられる可能性を示唆するためである。

(20)（新しい携帯電話を購入した A）[28]

A：げつよう日とる授業ないよう mail しづらいけど写真超おもしろいのー♡

B：今日も埃まみれになりながらがんばりやした✧✧✧写真は電池を喰うらしいから、気をつけなね～ (後略)　（ケータイメール, 2003, 276-277）

(21)（(20)を改変）

A：げつよう日とる授業ないよう mail しづらい。だけど、写真超おもしろいのー♡

B：今日も埃まみれになりながらがんばりやした✧✧✧写真は電池を喰うらしい。だから、気をつけなね～

一方で、本稿が対象とする媒体のうち、特に対人場面で僅かに文中の接続助詞の使用傾向が異なるひとつの要因として、(22)のような、同一文中と捉えられる範囲における「けど」の重複が、LINE やケータイメールで確認されないことが考えられる[29]。

---

[27] 本章で対象とする接続助詞はそもそも対象とする語数そのものが多くないこともあり、3 つの媒体すべての間で高い正の相関が見られる。但し、ケータイメールを基調に相関係数を算出した場合（ピアソンの積率相関係数）、LINE との相関は ρ =0.98、対人場面との相関は ρ =0.87 であり、「文中」での接続助詞でも LINE との正の相関の方が高い。

[28] ケータイメールの談話データの引用元である三宅(2006)では、絵文字を株式会社 NTT ドコモによって割り振られた識別番号に置き換えて表記している。本稿では、基本絵文字一覧（https://www.nttdocomo.co.jp/service/developer/make/content/pictograph/basic/）及び拡張絵文字一覧（https://www.nttdocomo.co.jp/service/developer/make/content/pictograph/extention/）を参照することで元の絵文字に復元を行った（なお、2005 年のデータはそもそも識別番号に置き換えられていない）。

[29] このような例は、対人場面の会話における「文中」で 17 例（のべ 40 語）見られた。なお、(22)のような発話が成立する背景には森田(1980)や永田・大浜(2001)で分析される通り、談話において「けど」が逆接や対比に限らず、前置きや挿入等、多様な用法を持つことがあると思われる。一方で、テキストベースの LINE とケータイメールでは、たとえ先に用いられたものと異なる用法

(22)（就職活動の説明会について）

JF098：（前略）=それでなんか、講演会があって、(うん)ANA もやるからあたし行こうと思ってたんだけどー、なんかね、インターネットで予約するんだけど、(うん)予約開始2時間ー(うん)2時間も経ってないぐらいで(うん)あたし見たんだけど、もういっぱいになってててー。 (BTSJ, 210-16-JFB025-JF098)

また、後者（「文末」）の接続助詞は、(23)のように主節相当のことばを濁していると思われる例（白川(2009)における「言い残し」）も一定数含まれるが、その一方で、(24)(25)のように一見、具体的な主節を補いにくい例も多く観察される。

(23)（テスト勉強が大変なことについて）

B：ひいいいい

B：暗記・・・・

A：みんなついったとかでも限界晒して、ちょっと、うん…

A：自分の手首自分で切り落とす！！とか喚いてたから…… （LINE, 016）

(24)（学校について）

JFB030： えー、学校か。

JFB030：「JM031 愛称」の学校行ってみたいんだけど。

JM031： あー来なくていいから。 （BTSJ, 232-16-JFB030-JM031）

(25)（A が教育実習に行っていることについて）

B：おう(@_@;)教育実習やっているのか。関心×２ ○中の生徒は手強そうだなぁ…たぶんね。ちなみに俺は就職活動中で今日も面接受けてきた

A：でも、私たちがいた頃よりは相当おとなしくなってるよ。ルーズソックス禁止らしいし。（後略） （ケータイメール, 2003, 281-289）

白川(2009)は、 (24)のような他者に認識を改めさせたり、何らかの行動を促したりするタイプの表現を「言い尽くし」、(25)のような事態に接しての受け止め方を示したり、併存する事柄を認識したり、その存在を暗示したりするタイプの表現を「関係づけ」と名付け、どちらも接続助詞で終わる表現ではあるが、文として完結性があることを分析している。本章の調査結果では、先に見た(23)のような例も文末の接続助詞

のものであったとしても「けど」を重複して用いることは避けられる様子が見られる。そのような、各媒体における発話の背後にある表現上の規範意識はさらなる分析が求められると言えよう。

として収集している点で、純粋に「言い尽くし」と「関係づけ」だけを観察できているわけではないが、各媒体で文中の接続助詞と文末の接続助詞の使用傾向がやや異なる[30]実態には、そのような表現の存在が大きく関わっていることが推測される。

また、媒体ごとの使用傾向の関係を見た場合、文末では LINE（表 13）とケータイメール（表 15）における最頻出の 3 語（「けど」「から」「し」）の順位や割合が異なることが読み取れる。このことから、同じく品詞として接続助詞と認定できるものであっても、発話内における用法によって一様には整理できないことが示唆される。たとえば、(24)を(25)のように置き換えても、それほど発話のニュアンスが変わらないように、本章が対象としたデータでも「言い尽くし」の言いさし文に現れる接続助詞は、極めて終助詞的な働きをしている様子が見られる。そのような接続助詞はやはり、単に節と節の間の連接関係を明示する接続助詞とは質的に異なる特徴を持つと言え、今後は本章でこれまで見てきた接続表現に留まらず、終助詞や感動詞等、他の言語的要素との関係の中で言語使用上の位置づけを探る必要があると考えられる。

(25)（(24)を改変）
JFB030： えー、学校か。
JFB030：「JM031 愛称」の学校行ってみたいんだよね。
JM031： あー来なくていいよ。　（BTSJ, 232-16-JFB030-JM031）

4.4 LINE における接続表現の使用傾向に対する補足的考察

前節では、LINE・対人場面・ケータイメールの 3 者を対象に、接続表現の使用傾向を調べた。その結果、接続詞・接続助詞ともに出現頻度または出現順位において 3 つの媒体で共通点を指摘できる特徴もあれば、相違点を指摘できる特徴もあることを述べた。前節で見た使用傾向には、各媒体の有する特性（用い得る伝達方法や利用者行動等）と個々の語の機能・用法のどちらもが深く関わると考えられ、今後、詳細な検証の余地がある。但し、ここでは議論のひとつの出発点として、LINE における接続表現の使用傾向を、前章における「発話の分割」と絡めて考察したい。

前節で見たように、本章で対象とした 3 つの媒体の中で LINE では、落合(2018b)同様、接続詞の出現頻度が極めて低い様子が見られた。対して、接続助詞に関しては相対的な出現頻度こそ最も低いものの、一定程度用いられる様子が観察された。そのよ

[30] たとえばどの媒体でも共通して「たら」の出現順位は大きく異なる。

うな実態には、特に、コミュニケーションにおいて用いられる接続詞に、他者のことばを受けるものがあることと、一方で LINE（あるいはテキスト）という発話環境でそのような接続詞の使用には一定の制約があることが関わると思われる。

対人場面の会話において接続詞は、(26)のように、しばしばターン交替直後の発話冒頭において他者のことばをどのように受け止めたかを示す役割を持つ。

(26)（大学卒業後の進路について）
JM036： まあ、院行ったほうがいいと思うよ、ここまできたら。
JMB012： やっぱ野球やってたら、就活とか無理だもん(うん)。
JM036： でもさ、体育会系ってさ、けっこう有利なとこがある<っていうよね>{<}。
（BTSJ, 250-16-JMB012-JM036）

このような接続詞使用については、日本語の対人会話に限ってもこれまで盛んに分析がなされており、単に自己の発話相互の連接関係を示す、典型的な接続詞使用とは異なる側面があることが論じられてきた（蓮沼 1991, 有賀 1993 等）。一方、LINE では、前章で観察した「発話の分割」のうち、特に「言及される話題ごとに発信が分割される例」に見られる話題の同時進行（輻輳）場面で、対他的な接続詞の使用に制約があることが窺える。たとえば、(27)は「B の枕」に関する話題と「共通の知人」に関する話題が独立に進む場面であるが、特に A1、A2 と B4、B5 の対応に着目した場合、対人場面における「ターン交替直後の発話冒頭」相当の位置は B4 と B5 それぞれに存在すると言える。但し、実際に B5 冒頭に位置する「へー」を「でも」や「だから」といった接続詞と置き換えた場合、B4 と一続きの発話と捉え得る余地が生まれることが推測される（B4 と B5 が「単純に複数の発信がなされる例」として解釈し得る）。

(27)（B の枕が栃木製であることについて｜共通の知人と最近話したことについて）
B1：でしょ〜〜！！可愛くて家に置いていきたくない笑
栃木 made！w
B2：おお！
B3：ふたりとも美人！
A1：え、まさかのお隣の県 w
A2：G さんと H さんとビーチバレーしたって言ってた
→B4：そうそう笑

→B5：｛へー／#でも／#だから／…｝！いいねえ！　（LINE, 041【「へー」の例】）

このように、LINE コミュニケーションの参加者が発信相互の関係を把握しつつやりとりを行う上で、2 番目以降の「話題の単位」冒頭での接続詞使用は極力避けると考えられ、本章の調査でもそのような例は(28)を含む 2 例が確認されたのみであった[31]。

(28)（A の交友関係について｜マラソンについて｜ゴキブリについて）
B1：高校の友達と遊ぶの？？
B2：しない（笑）
B3：やだ、きもい(´・ω・`)
A1：…高校の友達は連絡すらとるやついない…
　　同じ学科にいる奴と話すくらいだね σ(^_^;
A2：じゃあ[サークル名略称]10 キロマラソン（笑）
A3：アーモンドチョコレート転がってたらたしかにびびらない（笑）？
　　[サークル名略称]旅行で話しかけてみようかな((((*°　▽°　*))))　（LINE, 009）

一方で、当然のことながら接続助詞は、前節で触れた「言い尽くし」のように、一部では節末にて何らかの伝達態度を示し得るとしても、その品詞的性質から「ターン交替直後の発話冒頭」に位置し得ない。従って、本章の LINE を対象とした調査において、同じく複数の要素の関係を示す 2 つの品詞間に、使用傾向上大きな異なりが見られた背景には、上記のような発話環境に由来する制約の有無があると考えられる[32]。

なお、そのほか、LINE における相対的な接続助詞の増加要因としては、(29)A1-A2 のような「分かち書き」の途中において、他者の発信が挿入されるのを防げるという点で「一文が複数の発信に分割される例」が関わる側面も想定できる。但し、前章でも観察したように同様の様式の伝達は節に限らず、より小さな単位でも起こり得る。また、そもそもそのような伝達方法がとられる背景には、送信ボタンを押すまで「今、話している」ということを伝え得ないユーザーインターフェイスの存在があると思わ

[31] 一方で、(27)に見るように LINE において、感動詞（応答詞・フィラー）はそのような位置でも積極的に用いられる様子が見られる。LINE における感動詞の使用傾向は落合(2018a)も参照。
[32] ここでの考察は、ケータイメールでも接続詞と接続助詞でターン（＝「話題の単位」）あたりの出現頻度が大きく異なったことを踏まえれば、LINE に限らないテキストベースのコミュニケーション一般に適用できる可能性がある。なお、LINE とケータイメールでそもそも接続表現全体の出現頻度に大きな差がある実態には、落合(2018b)で触れた、LINE 上における個々の発話を極力簡潔に保つ要請が、ケータイメールではそれほど強くないことが関わると推測される。

れる。即ち、LINE 上で「今、話している」ということを意図的に伝えようとする際、細切れに発信を送ることそれ自体で既にその目的は達成されると言え、そこでの発信に含まれる接続助詞のみを直ちに接続助詞全体の増加と結びつけることは難しい。

(29)（A の体調について）
B1：本当によくなってほしいよう～
A1：ありがとう。。。。なんか、やっぱり体本当に弱いみたいで困ってるけど
A2：がんばってみるね！！ （LINE, 002）

5. おわりに

本稿では、LINE 上の言語使用を、他の媒体との比較も念頭に置いて分析する際、考慮が求められる「分析単位をどのように規定すべきか」という問題について議論を行った。具体的には LINE 上の談話データのうち、特に「発話の分割」に着目して観察を行い、そのような場面が「単純に複数の発信がなされる例」「一文が複数の発信に分割される例」「言及される話題ごとに発信が分割される例」といった 3 種類の様式に分けて捉えられることと、それぞれの様式に応じて、「発信の単位」「役割の単位」「話題の単位」といった分析単位を抽出できることを論じた。

また、議論を踏まえる検討の一例として、LINE・対人場面・ケータイメールの 3 者における接続表現（接続詞・接続助詞）の使用傾向を調査した。その結果、接続詞に関しては、①落合(2018b)の調査同様、LINE で全体的な出現頻度が低い傾向が確認できること、②ケータイメールでは、LINE に比べれば遥かに多く接続詞が用いられるものの、個々の語の現れ方は LINE と近いことの 2 点を指摘した。一方、接続助詞に関しては、③接続詞と比べた場合、LINE 及びケータイメールで相対的な増加が見られること、④直後に主節が続く従属節末で観察されるものの使用傾向では LINE とケータイメールで類似の特徴を指摘できること、⑤直後に主節が続かない節末で観察されるものの使用傾向では媒体ごとに異なる特徴が見られることの 3 点を見た。さらに、LINE 上で接続詞と接続助詞で使用傾向が異なる様子が見られる背景に、話題の同時進行（輻輳）場面における対他的な接続詞の使用制約があることを考察した。

本稿では、LINE 上の談話を客観的な指標をもって扱うことを念頭に、方法論的前提とケーススタディを示したが、残る課題も多い。特に、後半の調査で報告した結果と個々の語の用法の関わりには、十分に言及できなかった。今後の課題としたい。

参考文献

荒川歩（2004）「顔文字をいつ使用するかについての語りとその質的分析」『同志社心理』51 同志社大学心理学研究会 pp.17-26

有賀千賀子（1993）「対話における接続詞の機能について―『それで』の用法を手がかりに―」『日本語教育』79　日本語教育学会 pp.89-101

蓮沼昭子（1991）「対話における『だから』の機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要』4　姫路獨協大学外国語学部 pp.137-153

石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋（2009）「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12　一橋大学留学生センターpp.73-85

加藤由樹（2016）「既読無視と未読無視―LINE の既読表示機能に関する基礎調査―」『メディア情報研究』2　相模女子大学学芸学部メディア情報学科 pp.17-32

加納なおみ・佐々木泰子・楊虹・船戸はるな（2017）「『打ち言葉』における句点の役割―日本人の大学生の LINE メッセージを巡る一考察―」『人文科学研究』13　お茶の水女子大学 pp.27-40

三浦麻子・篠原一光（2002）「チャット・コミュニケーションに関する心理学的研究―ログ記録の解析にもとづく探索的検討―」『対人社会心理学研究』2　大阪大学大学院人間科学研究科対人社会心理学講座 pp.25-34

三宅和子（2006）「携帯メール分析共有データ 2003 年度版、2004 年度版、2005 年度版」文部省科学研究費補助金研究成果報告書「携帯電話利用が若者の言語行動と対人関係におよぼす影響に関する調査・研究」（代表：三宅和子、課題番号：15520271）pp.67-145

宮内佐夜香（2012）「接続助詞とジャンル別文体的特徴の関連について―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を資料として―」『国立国語研究所論集』3　国立国語研究所 pp.39-52

森田良行（1980）『基礎日本語 2』角川書店

永田良太・大浜るい子（2001）「接続助詞ケドの用法間の関係について―発話場面に着目して―」『日本語教育』110　日本語教育学会 pp.62-71

中丸茂（2005）「エモティコンの世界」橋本良明編『講座社会言語科学 2 メディア』ひつじ書房 pp.86-116

日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部複文』くろしお出版

西川勇佑・中村雅子（2015）「LINE コミュニケーションの特性の分析」『東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル』16　東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル編集委員会 pp.49-59

落合哉人（2018a）「電子媒体における『フィラー』」『筑波日本語研究』22 筑波大学人文社会科学研究科日本語学研究室 pp.75-104

落合哉人（2018b）「LINE と対人場面における接続詞の出現傾向について」『日本言語文化』42 韓國日本言語文化學會 pp.7-31

岡本能里子（2016）「雑談のビジュアルコミュニケーション―LINE チャットの分析を通して―」村田和代・井出里咲子編『雑談の美学―言語研究からの再考―』ひつじ書房 pp.17-26

岡本能里子・服部圭子（2017）「LINE のビジュアルコミュニケーション―スタンプ機能に注目した相互行為分析を中心に―」柳町智治・岡田みさを編『インタラクションと学習』ひつじ書房 pp.129-148

Sacks, H. Schegloff, E. & Jefferson, G.（1974）A simplest systematic for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50-4, Linguistic Society of America, pp.696-735

白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版

総務省（2018）「平成 30 年版情報通信白書」〈http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/h30.html〉（2018 年 10 月 15 日）

総務省情報通信政策研究所（2018）「平成 29 年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」〈http:// http://www.soumu.go.jp/main_content/000564530.pdf〉（2018 年 10 月 15 日）

宇佐美まゆみ（2013）「会話データの作成・分析―『総合的会話分析』と『基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese :BTSJ)』―」『日本語学』32-14 明治書院 pp.132-147

宇佐美まゆみ監修（2018）『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018 年版』国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブ・プロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」（リーダー：宇佐美まゆみ）

Werry, C.C.（1996）Linguistic and interactional features of Internet Relay Chat. In S.C. Herring(Eds.), *Computer-Mediated Communication: Linguistic, Social and Cross-Cultural Perspectives*, John Benjamins Publishing Company, pp.47-63

おちあい　かなと／人文社会科学研究科

（2018 年 10 月 15 日受理）